感染性脳動脈瘤の有無を確かめ，脳合併症発症1週以内の開心術は避けることが望ましい．

3）米国ユタ大学の心臓移植成績について
—375症例の検討—

横山 明裕 （新潟大学第一内科）
Dept. of med. Univ. of Mississippi
John B. O'Connell,
Utah Cardiac Transplant Prog. Univ. of
Utah Dale Renland,

【目的】米国ユタ大学での心臓移植症例を検討することにより，本邦での再開に備える．【方法】同大学移植部で，1985年3月から1991年4月までに移植した375症例（356人）を対象とした．この症例に対して年齢，性，術前心臓病分類，拒絶反応の有無，再心臓移植の頻度，転帰（予後および社会復帰）について検討した．【結果】年齢は9～68，平均49歳．男301人，女55人．術前心臓病分類は拡張型心筋症126人（35%），虚血性心疾患184人（52%）．難治性拒絶反応を呈した36人（10%）のうち18人に19回の再移植が行われた．転帰は術後6年生存率で80%だった．【総括】1）一流施設では，心臓移植後6年生存率が80%と良好だった．2）術後の問題点は，拒絶反応と感染症の対策である．3）356人中285人（80%）が自宅に帰ることが出来た．

4）最近3年間の当センターにおける新生児，乳児期複雑心奇形に対する心内修復術の検討

塚野 真也・小野 安生
新垣 義夫・越後 茂之 （国立循環器病センター小児科）
高橋 長裕・神谷 哲郎
八木原俊克 （同 心臓血管外科）

近年の先天性心疾患に対する外科的治療の進歩により，新生児，乳児期の心内修復術症例は増加している．1989年1月から1991年12月までの3年間に当センターで行なわれた1才未満の心内修復術は131例であった．主な内訳は心室中隔欠損38例（＋大動脈縮窄3例），共通房室弁口6例，ファロー四徴7例，ファロー四徴＋肺動脈弁欠損4例，ファロー四徴＋肺動脈閉鎖2例，両大血管右室起始10例，総肺静脈環流異常13例，大血管転位28例，総動脈幹遺残4例，大動脈離断6例，大動脈縮窄複合4例，肺動脈閉鎖2例，大動脈弁狭窄2例，大動脈肺動脈中隔欠損＋大動脈縮窄1例であった．ファロー四徴は4カ月から11カ月（体重 4.8 kg から 11.0 kg）の症例におこなわれ，いわゆる pink Fallot を除くと正常値に対する左右肺動脈径，左室拡張末期容積は1才以上の手術例に比し低値であった．また7例中，6例は右室切開は行なわれなかった．肺動脈閉鎖およびファロー四徴＋肺動脈閉鎖の右室流出路再建には transanular patch を使用し，またファロー四徴＋肺動脈弁欠損および総動脈幹遺残に対しては Rastelli 術が施行された．両大血管右室起始は10例に心内修復術が施行されたが，non-committed VSD，共通房室弁口を伴う症例など心内修復に対して問題点のある症例には肺動脈絞扼術がおこなわれた．大動脈離断，大動脈縮窄複合に対しては術前状態の比較的良好な症例に対しては一期的修復を行なう方針とし，大動脈離断の6例に一期的修復が行なわれた．その他大血管転位は新生児早期 Jatene 術例が増加し，総肺静脈環流異常はおおむね準緊急的に行なわれた．

第55回新潟消化器病研究会

日 時 平成4年2月8日（土）
午後2時より

会 場 第1総合生協会館
5F大ホール

一 般 演 題

1）Expandable metallic biliary endoprosthesis（EMBE）により改善した良性胆管狭窄の1症例

佐藤 秀一・宮崎 裕
渡辺 雅史・森 茂紀
須田 剛士・野本 実
上村 朝輝・朝倉 均（新潟大学第三内科）

症例は58才女性．1985年，自動車事故にて良性総胆管狭窄となり，膵頭十二指腸切除術が施行された．以後，逆流性胆管炎にて入退院を繰り返していた．1991年8月26日，急性胆管炎と診断され，緊急入院となった．入院後，腹部エコー，腹部 CT，PTC にて肝内胆管の拡張と，腸管への流出口の pin hall 状の狭窄が認められた為，同部位に対しバルーンによる経皮経肝胆道拡張術を2回行い，更にステント留置術を施行した．ステントは狭窄部に留置することが出来，狭窄部は径 4 mm まで広がり，合併症も認めなかった．良性胆管狭窄に対し EMBE を施行し，奏功した症例を経験したので，稀な症例と考え報告した．